『マルチモーダル人類学先端研究会』

○私たちについて

先端研に所属する多様なバックグラウンドと研究関心をもったメンバーによる研究会。
近年、学術の対象と手法は、従来のテクスト的・理性的なものを超えて、マルチモーダルかつ情動的なものを含むようになっています。マルチモーダル人類学とは、論文だけでなく映画、写真、録音、展示、ハイパーテクスト、XR、漫画、詩、小説など多様なモードを用いる、文化社会人類学の領域です。本研究会は、人類学を超え、テクスト知に限定せずに異なったモードの知と往還する「マルチモーダルな人文社会科学のあり方」について、理論（文献購読）と実践（映像作品などの鑑賞）を往還しながら学ぶことを目的としています。

〈現所属メンバー〉

- 加藤このみ（共生２）：カナダの刑務所における演劇創作活動に着目し、社会から「逸脱」した受刑者にとって「語り、演じる」とはどのような経験であるのかを考えています。
- ふくだぺろ（共生８）：アフリカのトゥワ・ピグミーの人々の生活の参与観察を行い、支配や抑圧を生まない「平等主義的暴力」について、マルチモーダルな手法を駆使して研究しています。
- 柴田惇朗（共生６）：専門は芸術社会学。多様な社会的条件のもとで小劇場演劇人がどのように活動を維持しているかを研究しています。
- 藤本流位（表象６）： 2000 年代以降の現代アート、特に国際芸術祭におけるアーティストの実践を事例に、出来事や状況の運営者としてのアーティストがつくりだす暴力の表象を研究しています。
- KIM KYO（表象５）：デジタル空間内での個人主権概念、デジタル法システムについて研究しています。また、フランスを拠点とするアート・コレクティブ Black(s) to the Future のメンバー、デジタル/映像アーティストとしても活動しています。

○これまでの活動の一部

- 研究メンバーがアフリカで撮影した映像作品の鑑賞と議論
- 『リヴァイアサン』（2014）の鑑賞と議論
  - ルーシァン・キャスティーヌ＝テイラーとベレナ・パラベル（ハーバード大学の感覚人類学研究所所属）によって制作された海洋ドキュメンタリー

○今年度の活動予定

- ９月　ハルーン・ファロッキ『戦争のイメージと戦争の刻印』鑑賞と議論
- 11 月頃　ゲスト講師招聘予定（倉敷芸術科学大学の川上幸之介先生を予定）※変更の可能性あり

○連絡先

代表：加藤このみ　　email：gr0635vs@ed.ritsumei.ac.jp